

総力特集

「らしき」をゆさぶる、MANY MEIJIs 明治はひとつ、じゃない

例え「調布世代らしき」。「猿楽町世代とは違い、調布世代はTOEICや他大受験などで優秀な成績をおさめている」というオジサマたちの言葉は、調布世代の若手にとって、むしろキョークツじゃないだろうか。

今年度の会報テーマは、「ONE MEIJI」明治はひとつ」。そこで、ひねくれ者の『M』は考えた。会報にケンカを売るわけじゃないけど、「MANY MEIJI」明治はひとつ、じゃない」をテーマに、明治をとりまく様々な「らしき」をゆさぶってみよう。ラスボスは「明治らしき」。会報と読み比べつつ、楽しんでいただきたい。(朝倉・塩出・三浦)

オトナの過程



Vol.3

2018年10月1日
総明会広報委員会
『M』編集部



明治らしき p1, p4

紫紺の色メガネを外す

調布世代らしき p2

私たちがほめないで

総明会らしき p2

あのネタが通じない?

先生らしき p2

3週間、先生をやってみた

女らしき p3

ジェンダーを「見える化」する!

★編集部メンバー募集中!
m.meiji.soumeikai.koho@gmail.com

明治らしきをゆさぶる

子供を母校に入れない理由

明 校は、自分の子供を入れたいような学校だ、とよく言われる。総明会会報でも、「子供を母校に」とか、「親子そろって明校OBOG」といった記事が、何度も組まれてきた。でもでもでも。よくよく考えると、親子そろって明校という事例は、全体から見ればごくわずか。明校に対するOBOGの認識は、もっと多様だ。今回は、従来着目されてこなかった、「子供を母校に入れない理由」の方に、焦点を当ててみたい。

母 校愛あふれる先輩方も、子供の受験と母校とは、切り離して考えるケースが多いようだ。そこには、「受験生の親」の冷静な目が。明校に難なく合格できる偏差値であれば、受験校や他の大学付属校を狙いたいし、付属を考えるならば、「お受験」も視野に入ってくる。「今の偏差値で将来明治大学なのはもったいない」という、手厳しい声も。「東京都に住んでいると西調布は通いにくい」、「男子校に入れたかったため、共学となった明高は選択肢から外れた」との回答もあった。

親 明治愛ゆえに、かえって子供が引いてしまった例も。ある先輩の娘さんは、父のあふれる明治愛と熱心な総明会活動をよく知っているだけに、むしろ、「親の学校にだけは絶対に行きたくない」、「暑苦しさが嫌だ」と語っていたという。右の漫画も、別の先輩の実体験に基づいている。トホホなエピソードに、家族の物語が垣間見える。(三浦・井畔・土屋)

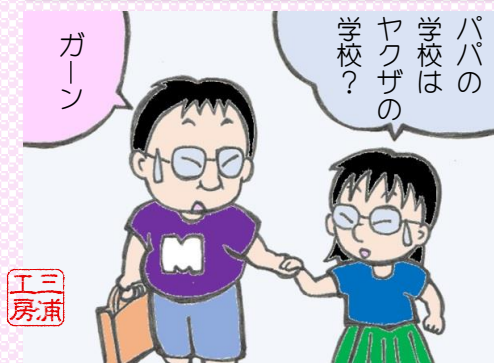
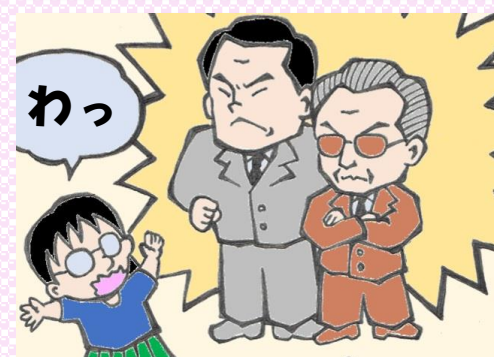
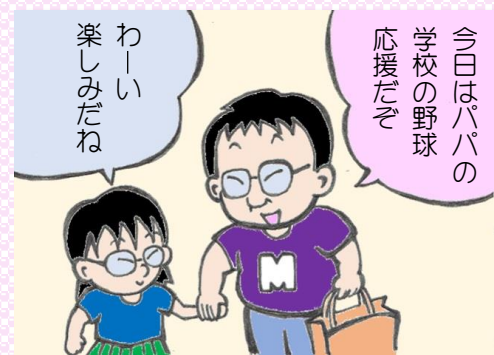
取材にご協力いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

編集後記 「ゆさぶる」をゆさぶる、修学旅行が高IIに?

「らしきをゆさぶる」というテーマを聞いて、最初に思い付いたのは、修学旅行のことだった。実施時期が高三から高二に移り、卒業まで学校行事を楽しめるという、付属校の特権が薄れた、と思っていた。ところが意外なことに、かつて明校の修学旅行は、高二行事であつたらしい。つまり、私たちの知る「付属校らしき」も、実は、比較的最近できたイメージにすぎなかった、というわけである。

『M』第三号のメッセージは、「らしき」はゆさぶることができる、ということだった。だとすれば、今回の記事から見えてくる『M』らしきも、またゆさぶることができるはずだ。読者の皆様には、「ゆさぶるをゆさぶる」という視点で、記事をお読みいただければ幸いです。(井畔・坂本)

「明治愛、世代をこえず?」の巻



ところで 調布世代の意識は?

本誌記者の井畔が、友人たちに「将来、自分の子供を明校に入れたいか」たずねた。目立った回答は「どちらでもない」。キレイな校舎、受験負担の軽減が、「入りたい理由」として挙げられる一方、「真面目な子じゃないと窮屈な学生生活になってしまう」という声もあった。卒業したばかりの大1にとって、この質問は実質的に、「明校にもう1度入りたいか」という問いかけとして、受け止められたのかも。

★男子校時代を生き抜いた屈強な先輩たちの集団……。確かに初めて見ると、その筋の人に見えてしまうかも? (いや、失礼)

明治らしきをゆさぶる、歓迎されすぎて、アウェー?

【主人公】フサアキ君

明校卒の大3生。これまで、自分が総明会の会員なのかどうかすら分かっていなかったが、11月の懇親会では、明校卒の先輩による就活支援行事「就活会」が開催されると知り、一念発起参加してみることに。当日は、年の近い先輩から、実感のこもった就活体験談を聞くことができたのだが……!?

20XX年11月 総明会懇親会

就活会が終わり、懇親会に参加してみると、そこには年の離れたおじさんばかり。就活会で知り合った20代の先輩に案内されて、志望業界の40代の先輩のもとへ、ご挨拶にうかがった。

さらに、部活の話題がきっかけで、今度は60代の先輩に紹介していただ

き、そこからは怒涛の挨拶の連鎖……。若いと珍しがられ、「ぜひ総明会活動へ」、「組織委員になりませんか?」、「再来年は就活会の講師に!!」……といった勧誘の嵐。「世代は違っても同じ明治だ」という母校愛あふれるお話や、「もっと若手に来てもらうには?」という答えづらい質問も。こ、こゆすぎる……。歓迎されて有難いけれど、されすぎて、むしろちょっとアウェーなフサアキくんでした。

※若手の実体験に基づくフィクションです。(土屋)

「女らしさ」「男らしさ」を決めつけないで!

『M』の女子メンバーが作る本ページ。第1号では女子制服特集しました。既存の制服紹介を一新して、明治女子制服の魅力を伝えるため、スポーツ新聞をコンセプトに作成。しかし、実は各方面から「男子校のノリで作った記事」との声が。いや、執筆者全員、女子なんです……。女子は「可愛い」「清楚」だけではないし、男子も「イタズラ」「悪ノリ」だけではございません。昔男子校だったからこそ、ジェンダーの問題をきちんと取り上げねば。今回の企画のきっかけになった出来事でした。



お酌はご自身で! 女子は店員じゃない。

20歳を過ぎて女子が最も気を付けなければならないものの1つ、「お酌オジサン」。若いから、女性だから、とってお酌を当然のように求めてくる妖怪です。オジサンからは「お酌の相手に女性を選んでいるのだから、選ばれて喜んでほしい」という意見も。女子も注ぐ人を選ぶ権利があるので、自発的ではなく強要されたお酌なら、注ぐふりして相手の頭にひっくり返しましょう。女子は店員でもコンパニオンでもないのです。お心当たりある男性も、妖怪にならぬようお気を付けて。



記者は見た! 総明会のジェンダー意識 (三浦)

女子の卒業生が増え、総明会も本当の意味での共学化に向け、動き出しています。とはいえ、性別役割分業の意識はなおも根強く、どんな言動がセクハラになりうるのか、ということも、きちんと共有されていない部分があります。男に対するセクハラ発言(男になら何聞いても良いわけじゃないんですよ、先輩)や、SOGIハラにもまだまだ無自覚だと思います。かくいう私も、教育実習で生徒を傷付けたのでは、という後悔から、マイノリティーやジェンダーについて学び始めました。総明会も、きっと変わる。先輩方、一緒に変えていきましょう!



共学化して10年。4学年のOGが社会人に。働く明治女子の苦労を、男子校時代の卒業生や、これから社会に出る後輩たちにも伝えたい。明校OGが、社会のキュークツなジェンダーを考えます。

(女子メンバー)

「女性限定」が就活の幅を狭めてない?

大学後半は就職活動がはじまります。就職活動といっても、今は短期もあれば長期もあるし、説明会などのイベントという形も。この間参加したのは、女性限定のインターン。自ら希望した訳ではなく、企業側からのグルーピングで参加が決まったものです。当日は女性しかおらず新鮮とも異様ともいえる光景でした。女性の積極採用は動きとしては有難いけれど、その中で多様な働き方をもっとフォーカスしてほしいなど、生意気かもしれませんが、感じたことを素直に主張します。



仕事の失敗を責めるフリして……!

仕事の失敗で誰かに迷惑をかけたならば、叱られたことは受け入れられる。しかし「女性だから」を理由に咎める言葉には要注意。「事務にでも変わったらいんだよ、お嬢さんにこの仕事は無理!」。先方から言われた、職業差別でもあり、女性差別でもあるこの言葉も実話です。ミスの原因に性別は関係ない。ましてミスを的確に指摘できない方の能力を疑います。大抵、こうした叱責は的外れで、ただ八つ当たりの可能性が高いので、強気に向かいましょう! 負けるな、女子!



共学化と「男らしさ」(男子メンバー)

ちょっとだけ学校の話も。男子校時代、「男らしさ」が求められることは、あまりありませんでした。何しろ男しかないのです。でも共学化によって、男子の周りにも様々なジェンダー問題が。何で重いものを運ぶ役は、必ず男子? 男子はスポーツと理数系科目ができなきゃいけないの? ……などなど。「今は女子生徒の方がしっかりしている。調布世代の男子は男らしくない」とか、急に言われましても。「男らしくない」男たちにとって、男子校の方が生きやすかった、というのも皮肉な話ですが……。



調布世代らしさを
やぶさる **イコは
つらゆ**

あまり調布世代をほめないでほしい。つらいつらね、正直。英検やTOEICの成績で、「猿楽町世代とは違う」調布世代の「優秀」さが強調され……。知らぬ間に、大人から「優等生」扱いされているようです。

大学からの期待も大きい。他大受験生の数がグーンと増え、結果も、こりゃまあ素晴らしいって、また「優秀」と言われ。ほめられるのに違和感を持つ日々でございます。生徒全員が「自分は優秀だ、ハッハッハ」と思っている訳ないですよ……。

一方、「猿楽町世代とは違う」「優秀」な調布世代という評価には、「男子校時代の破天荒さ、面白さが無くなった」という真逆のイメージも含まれているような気がします。「優秀」な実績ばかりが宣伝文句としてアピールされる違和感。ていうか、そもそも我々は「優秀」なんすかね?

私が大学で学ぶ歴史学では、史料を探し求め解釈し、やっとの思いで論をまとめ、提出したら跳ね返され、最初からやり直し……。 「長期間」の試行錯誤が求められます。せつかくの大学付属校。「高校在学中にTOEIC XXX点」といった、「短期間」で好成績を修める力より、段階を踏んで「長期間」の作業を達成できる力を、後輩たちに付けてほしい。そして、大人は等身大の「調布世代」を温かく迎えてほしいです。(井畔)

『M』編集部会メンバー

- 林田こずえ (H23)
- 三浦直人 (H23)
- 土屋弦 (H26)
- 坂本駿太 (H27)
- 垣田菜子 (H28)
- 井畔杏里紗 (H30)
- 高橋凌士 (H23)
- 朝倉貴紀 (H24)
- 岩田滯夏 (H27)
- 塩出研史 (H27)
- 高波茉生 (H28)

先生らしさを
やぶさる **教育実習体験記 (坂本)**

1-1 明校における教育実習
・2018年6月、本誌記者の(坂本駿太)が明校で教育実習。担当科目は(理科)。
・教育実習生は(生徒)と(先生)の間。
→(先生)にはなりきれないが、(生徒)時代には見えなかったものが見える。



1-2 坂本が感じた「先生らしさ」
【中高生時代】:先生は(過去にストックした知識)を使い、毎年同じ授業をしているイメージ。←先生方、ごめんさい(冷や汗)
【実習を経て】:先生は(新たに仕入れた知識)を授業で(還元)し、変化し続けている。
→授業準備に追われる日々。学び続け、授業内容を更新し続けることで成り立つ仕事。
※最初から全てを知っているわけではない。でも、それを生徒には悟らせない。

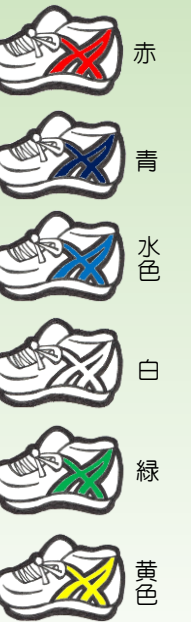


まとめ:先生も生徒同様(学び続けている)。だからこそ、教えることができる……のだと思う。(空欄・各2点)

総明会らしさを
やぶさる **上履き世代論の終焉**

総明会における「共通の話題」の代
表格は、上履きの話であろう。かつて
明校では、六色の上履きによって、在
籍する六つの学年を区分していた。ゆ
えに総明会の自己紹介では、「上履き
の色は〇〇」が常套句となっていた。し
し、上履きの色が同じならば、年齢差
を超えた親近感を抱くこともできる。

同窓会とは、ある意味「想像の共同
体」(B・アンダーソン)である。何十
歳も年の離れた者同士が、先輩・後輩
として結び付くには、校舎・教員など
の「共通の話題」によって、見えない
つながりを「想像」する必要がある。



とこがこの「上履き世代
論」、実は移転後の入学生に
は、もう通用しない。従来の
六色が、赤・緑・青の三色に統合され
てしまったためである。上履きなど
些細な話題で盛り上がる、という総
明会の特色は、徐々に失われつつある
のかもしれない。一方で、思わぬ「共
通の話題」が発見されることもある。
昨今では、卒業式当日に捨てられてい
く上履きの山が、三月の「風物詩」と
なっている。その写
真を見た大先輩が、
ふとつぶやいた。
「昔の制帽と同じ
かもしれないな」



(三浦)